

久生十蘭全集

VII

久生十蘭全集 VII

編集委員 大佛次郎 荒 正人
安部公房 中井英夫

久生十蘭全集 VII

一九七〇年五月三十一日 第一版第一刷発行
一九七四年六月三十日 第一版第二刷発行

編者 大佛次郎・荒 正人・安部公房・中井英夫

◎ 久生幸子 一九七〇年

発行者 竹村 一

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京(二九)三二一三・三二一五番

振替東京八四一六〇番

郵便番号一〇一

印刷 文栄印刷株式会社 製本 株式会社鈴木製本所

(第六回配本)

目次

金狼
7

キャラコさん
93

社交室
95

雪の山小屋
123

蘆の木笛
147

女の手
169

鷗
196

ぬすびと
229

海の刷画
244

月光曲
259

雁来紅の家
278

馬と老人
288

新しき出発
298

作品年表
313

解説 渡辺啓助

319

久生十蘭全集

VII

金狼

1

市電をおりた一人の男が、時計を出してちょっと機械的に眺めると、はげしい太陽に照りつけられながら越中島から枝川町のほうへ歩いて行った。左手にはどす黒い溝渠をへだてて、川口改良工事第六号埋立地の荒漠たる地表がひろがっていて、そのうえを無数の鷗が舞っていた。

その男は製粉会社の古軌条置場の前で立ちどまると、ゴミゴミした左右の低い家並を見まわしながら、急にヒクヒクと鼻をうごかしはじめた。なにか微妙な前兆をかぎつけたのである。

斜向いの空地のまんなかに、ブラック建ての、重箱のような形の二階家があつて、大きな柳の木が、その側面をいっぱいに蔽うようにのたりと生氣のない枝を垂れていた……

男はひどく熱心にその家を眺める。それから、入口のガ

ラス扉のそばへ近づいて行つて、ほとんど消えかけているペンキ文字のうえへかがみこんだ。

〈10 銭スタンド、那覇〉と書いてある。

しばらく躊躇ったのち、その男は思い切つたように扉をおして、酒場のなかへはいつて行つた。

うす暗い酒場のなかにはまだ電灯がついていて、土間のうえの水溜りが光っていた。ぶんと、それが臭かつた。番台では汚れ腐つた白上衣を着た角刈の中僧が無精な科でコップをゆすいでい、二人の先客がひっそりとその前の卓に坐っていた。

一人は縮みあがつた綿セルの服を着た五十歳位の、ひどく小柄な小官吏風の男。まるで顎というものがなく、そのうえ真赤に充血した眼をしているので、ちょうど二十日鼠がそこに坐っているように見える。もう一人は四十歳位で黒いソフトをあみだに冠つた、すこしじだらくな風態だが一見して高等教育を受けた男だということがわかる。酒のみだと見えて、鼻のあたまで赤く熟しかけている。

たつた今はいつて来たほうは、夏帽を窮屈そうに膝に抱えたまま、見るからに落ちつかないようすで街路のほうを眺めている。なるほど、こういう場末町の不潔な酒場にはそぐわない男である。凄いはどひき緊つた、端麗な顔をした三十四五歳の青年で、すっきりとした薄風の背広に、朱の交つた黄色いネクタイをかけ流していた。銀座でもあまり見かけないような美しい青年である。

青年も二人の先客も、互いの眼をはばかりるように背中合せに坐ったまま、さつきから身動きしようともしない……。こんな風にして時間がたつ。

それから二十分ほどすると、急に扉があいて、二人の男が前後になつてはいつてきた。

一人は小鳥のようにうるさく頭を動かし、キョトキョトと酒場のなかを見まわしながら、なにかしばらく躊躇っていたが、やがて、逃げるように出てゆくと、たちまち街路のむこうへ見えなくなつてしまつた。

もう一人は菜葉服を着た赧ら顔の頑丈な男で、番台に凭れかかると、そこからじろじろとしつつこく三人を眺め、それから、

「オイ、鶴さん、米酒」

と、酒棚のほうへ顎をしゃくつた。

このほうは、どうやらここの常連らしい。発動機船の機関士か造船所の旋盤工というところ。チャップリン髭をはやしているのが異彩をはなつ。

手の甲で唇を拭うと、妙にきこえよがしに、

「おう、今朝だれか俺をたずねて来なかつたかよ、鶴さん……」

と、男にきいた。男は頭をふつた。（この問答をきくと、三人の客は一斉にちよつと身動きしたようであつた）

菜葉服は、ふうん、といくども首をかしげてから、こん

どは低い声で、

「……じゃなあ、俺はまたちよつと機械場へ行つてくるからよ、古田……古田子之作つてたずねて来たやつがあつたら、子之はじきまたここへ戻つてくると言つてくんナヨ。

……おい、頼んだぜ、鶴さん。すぐ戻つてくるつてナ、いいか」

くどく念をおすと、バットに火をつけながら出ていった。酒鼻はそのあとを見送りながら、思い出したように時計をひきだして眺め、おや、十一時か……と、つぶやく。すると二十日鼠はつぶつていた眼を急にパッチリとあけて、

「失礼ですが、いま何時でございましょう。正確なところは……」

と鹿爪らしい声でたずねた。

「十一時十分。……正確に言えば、十一時九分というところですか」

二十日鼠は頭をさげると、また壁に凭れて眼をとじてしまった。酒鼻は時計をしまひながら、青年に、

「あなたもここは始めてでしょう。……私はひとを待っているんですが、どうもたいへんなところ……」

「始めてです」

にべもない返事だつた。酒鼻はいまいましそうちに、男のほうへ向きなおると、

「オイ、ときに、ここのマダムはどうした」と声をかけた。男はせせら笑つて、

「マダム？ ……大将ならまだ二階で寝てまさ。……昨夜すこしウタイすぎたんでねえ」

「喧嘩か」

「なあに、……昨夜妙な女がひとり飛びこんできてねえ……なにしろ大将はスキだから、いきなりそいつとツルんでだいぶんひつかぶったらしいんでさ。……もつとも、あつしゃ昨日は昼番、その時はいなかったが、いっしょう浴びたテアイのはなしでは、なにしろ女あ大した豪傑で、……お相手しまししょう、てな調子で割りこんでくると、あとはもう、奴、酌げ酌げ、さ。……さすがの大将も、しまいはオッペケベになつて、とうとう兜をぬいじまったんだそうだ。……あつしゃ、すらっとした後ろ姿を拝見したただけだったが、連中の話じゃ、二十三四のモダン・ガールで、こいつがどうもやけにいい女だったそうでさア。……なんでも洲崎のバアの女給だつてえこつたが、いってえどういうんだらうねえ、その女……」

この時、また扉があいて、すらりと背の高い、二十二三の娘がはいってきた。

蓮色の服に、黒いフェルトの帽子をかぶった、明るい顔つきの、いかにも美しい娘だった。酒場のなかを見まわすと、青年のとなりの椅子にぎこちなく掛けて、ものおじしたようにうつむいてしまった。

ポート・ワインを酌いで、また番台へ戻つて来ると、男は新聞をとりあげて、

「おや、また人殺しだ」と、とつてつけたように言った。

「……えー、薪割りよりのものにて、……滅多打ちにしたものらしく、六畳の血の海の中で、……よく流行るねえ、このごろは。……こないだも野銭場の砂利仲仕が、小名木川の富士紡の前で、どてつばらを割られて倒れていたが、……どうもひでえもんだねえ、大腸をすっかりひろげちゃつて、……苦しいのか、せつねえのか、そいつを自分の両手で、手繰りだすようにして死んでゐるんでさ。いやになつちやつたア、あつしあ」

あちらこちらの工場のサイレンが鳴り出す。すると、それが合図のように、さっきの葉葉服が戻つて来た。つかつかと番台の前へ行つて、

「なに、だれも来ねえ？ ……そんな筈はねえのだが。……（首をかしげながら）じゃ、おやじが知ってるかも知れねえな。……おい、鶴さん。おやじはまだ寝てるのか。……ふうん。……じゃ、すまねえが、ちよつと起してきてくん。子之がききてえことがあるってヨ。大至急な用なんだからヨウ」

「大将はまだ夜中だぜえ、子之さん。それに、ゆんべは……（と、いいかけて、急に二階のほうへきき耳をたてると）おう、だれか二階をあるいてら……。へ、へ、大将が正午まえに起きたためしはありやしまし、して見ると、……（酒鼻のほうへにやりと下素っぽく笑つて見せ、子之に）起すのはよしなよ、殺生だぜ、女がきてゐる」

と、小指をだしてみせた。

二十日鼠がついと立ち上った。が、それは帰るのではない、
 くて、

「甚だつかぬことをお訊ねするのですが、みなさん、ひょっとしたらあなたがたも、わたくしと同様、未知の男から手紙をもらって、それで、……その、誰れかわからん人間をここで待っておられるのではないのですかな。たいへん失礼ですが……」

二十日鼠がこういうと、ほかの四人の顔にさっと血の色がさして、たがいに狼狽したように眼を見あわせた。

「……じつは昨日、わたくしは未知のひとつから、遺産相続の件で、内密にうれしい相談をしたいという手紙をもらいました、それでここへやって来たのです。……わたくしには、南米のサン・パウロで働いておる年齢をとった叔父があるにはあるのですが、しかし、どうもありそうもないこととでね。……はじめは冗談か詐欺かと思った、だが、人間慾にかけるとたわいのないもので、そう思いつつ、結局、まあこうしてやって来たというわけです。……どうです、みなさんもそういうわけではなかったのですか」

そういつて、四人の顔を見まわすと、ずいぶんひとを喰った笑いかたをした。たれも否定するものはなかった。途方に暮れたような色がみな顔にあった。二十日鼠は、
 「……はは、（と、苦笑しながら）やつぱりそうでしたか。その手紙をここに持っておりますが、……ひとつ念のため

に読んで見ましょうかしらん」

と、言いながら、もぞもぞとポケットを探して、邦文タイプライターでうつた紙きれをとり出すと、ひどく朗詠風に読みはじめた。

一、火急に就き小生の身分は申上げず、御面晤の折万々御披露可致候

二、小生は貴殿が相続の資格を有せらるる未知の遺産につき、至急御通知申上ぐる義務を有し候

三、右は不動産、有価証券並に銀行預金にて、財産目録は御面晤の折御一覽に可供候

四、右は貴殿に於て当に失格せんとするものにて、至急資格申請並に諸般の手続を了する必要あり、猶々以上の外公表を憚る錯雑せる事情之有、御面晤の上篤と御説明申上ぐる外無之に付、左記場所まで日時相違なく御来駕給り度願上候

敬具

六月 四 日

一、六月五日、午前十時。

一、深川区枝川町二二五番地。

「那覇」、いとまんは糸満南風太郎方。

二十日鼠は椅子にかけると、不機嫌な顔をしてだまりこんでしまった。青年はすこし顔を赧らめながら、

「……僕も幼稚なんですな……その手紙はここに持って

いますが、……でも、僕にも多少そういうところあたりがあるのだ。……もつとも、半分は好奇心ですが。……（そして、微笑しながら娘に）あなたもそうですか」

と、優しくたずねた。

娘はやつと顔をあげると、もの悲しげにつぶやいた。……美しい声であつた。

「あたし、半月ほどまえに、はじめて東京へ出てきまして、いま新宿の「ヘシネリヤ」ではたらいしておりますの。……きのうの朝、十時頃、あたしのアパートへ女のひとから電話がかかってきて、いまの手紙とおなじことを言つて、あたしにぜひきてほしい言うのやし。……男の声のようなところもあるし、あたし、店のお客さんがいたずらしてるのだと思うて、いやや、ゆうて、笑いながら電話をきりましてんの。（すこし笑つて）でも、ゆうべは、いろいろ空想をたくましゅうしてとうとう朝までよう寝られんのでした。

……子供のとき生別れた父が、まだどこかに生きているはずなんですの。……今朝、そんな馬鹿なことないといくとも思ひかえしましてんけど……」

葉葉服は辛抱しきれない風で、横あいからひったくつた。「俺のほうもそうなんだヨ。……富岡町の支那屋で雲吞を喰つてると、そこへ電話がかかってきたんだ。上品な女の声でねえ……。こいつあ、たしかですぜ。（じろりと娘の顔を見ながら）嘘もまぎれもねえ女の声だったんで……。それで、なにしろそういううめえ話だから、あつしゃ喜んで、

で、承知した、きつとお伺いしましょう、つて返事をしたんだ。……もちろん、初めは……。あつしだつていろいろ気をまわして見たさ。だがねえ、あつしの考えじゃ、どうも冗談たあ思われなかつたんだ。ちゃんとすじが通っているからね」

二十日鼠が、ふふ、と苦笑した。葉葉服はむつとしたようすで立ちあがつた。

「おい、妙な笑いかたをするじゃねえか」

二十日鼠が言いかえす。葉葉服がいきり立つ。男までそれに加わつて、おい追ひ手のつけられないようすになつて行つた。

娘は眼にみえないほど、すこしずつ青年のほうへ寄つていった。初対面の男たちが下素つぽく罵りあつてゐる。この不潔な酒場のなかでは、青年の端正な美しさは、たしかにひとつの救いであつた。

娘は青年の耳元でささやいた。

「……ここがわからんで、あたし、ずいぶん探し廻りましてんの。……しよむない……あたし、やつぱり慾ばり女なんですわ」

彼女のいいかたは、いかにもあどけなかつたので、青年は微笑せずにいられなかつた。

「でも、今のところまだ、担がれたんだときまつたわけでもありませんし……」

腕組みをしながら、隅のほうで超然と三人の論争をきき

流していた酒鼻が、急に口をきりだした。

「小生もこれを冗談だときめてかかる必要はないと思う。

要するに、手紙の差出人がまだやってこないと言うだけのことなんだからねえ。……一年もたつてからなら、やっぱり担がれたんだろうと思うがいいさ。しかるに、約束の間よりまだ二時間しか経っていないんだ。どういう余儀ない事情で遅刻しているのか知れやしない。それに、小生ひそかに、これは冗談ではない。なにか重大なわけがあるとにらんでいるんだ。……そもそも、われわれ五人をこんな酒場によびだしてなんの利益がある。たいして面白い観物でもありやしないからねえ。……また、ことによれば、あの手紙の差出人は、実はここのおやじ、すなわち、絳満南風太郎君それ自身かも知れないということだ。……あるいは、そうでないかも知れん。……しかし、たぶん、……多分、彼はこれについてなにか知っている。すくなくとも、彼はわれわれを釈然とさせるに足る説明の材料を、持っている筈だと小生は思う」

葉葉服がうなるように言った。

「だから、俺あさつきからそう言ってるじゃねえか。ここのおやじにきけあ話がわかるってヨ。……それをこの先生が、（と、露骨に二十日鼠を指して）おっひゃらかすようなことを言うから、俺あ腹をたてるんだ。（こんどは酒鼻に）どうです、こんなことをしてるより、ひとつ、おやじを起してきて見ようじゃありませんか。（また、二十日鼠

にむかつて）おめえ、冗談だと思うなら、こんなところにまごまごしていることはなかるう。さっさと帰んなヨ」

「さよう。そろそろ失敬しよう。……なあに、どうせ話はわかってるんだ」

そのくせ、腰をあげるようすもなかった。

酒鼻は男ボーイにむかつて、

「オイ、若い衆、ハエ太郎君を起して、ここまでつれてきてくれ。……おやじがなにか知ってるなら、われわれに説明する義務があるんだ。……反対に、もしなにも知らないてえなら、せつかくのご休息をお妨げしたについて、われわれ一同は、謝罪のために、大いにここで飲むことにする。……すくなくとも、小生は大いに飲む。……もう正午も過ぎてるんだ。とつと行つて起してこい……」

男ボーイは頭をかきながら、

「大将を起すんですかい。……いやだなア。またがみつかれらア」

「だからヨ、みなであやまってやらあナ」

すると、酒鼻は大きな声で叫んだ。

「わかったぞ！ ……やい、ボーイ。そういう風にぐずつくとところを見ると、貴様も同類だな。あの手紙は、酒場の人集せにやった仕事だろう……。どうだ、白状しろ」

「じよ、冗談いうねえ。うちの大将はそんなじゃねえや。……おめえらのような貧乏人を集せたつて、切手代のほうがたかくつかあ、馬鹿にするな。……うちの大將ぐれえ寝

起きるわいるいはねえんだからよ。それさ、あつしがいやなのは……。だがまあ、それほどいうんなら起きてきまさ」

男は板裏を鳴らしながら、酒場の奥の狭い階段を、パタリ、パタリと、のろくさくのぼっていった。やがて足音は五人の真上へくる。

男はそつと扉を叩いている。階下では五人が、音のする方へ耳をすます。男はこんどはやや強く叩きながら、どなっている。

「大将……大将……もう正午すぎですぜ」

みな返事をまっっている。……が、返事がない。

割れるように扉をたたく音が、酒場じゅうをゆすぶる。

「大将……大将、工合でも悪いんですか」

返事がない……

男がころがるように階段を駆けおりてきた。酒鼻がボーイを抱きとめる。

「返事をしない……（顔をしかめながら、うわずったような声で）ああ、こいつあ妙だ。……こんなことははじめでなんで……どうしたってんだらう……あつしゃ、もう」

酒鼻がいった。

「よし！ 一緒に行つてやろう。……とにかく見てみなくては……」

そこで、硬ばった顔をしながら、二人が階段をのぼつてゆく。絲満の部屋の前へくると、酒鼻は鍵口からなかをのぞいた。

「……雨戸がしまつてゐるんだ。……真つ暗でなにも見えやしない」

二人で力一杯に扉を叩く。……依然として返事がない。なにかひどく臭う。

「……オイ、いやな臭いがするじゃないか……（なにか考えていたが、急に顔色をかえると、おしつけるような声で）俺は知つてゐるぞ、この臭いを……。おい、若い衆！ 早く交番へいつて巡查をよんでこい！ 早く！」

ボーイが駆けだす。酒鼻は男のあとからのつそりとおりて来た。すこし震える声で、

「巡查をよびにやった。……扉がしまつていて、……それに妙な臭いがするんだ」

「どんな臭いですか」

と、二十日鼠がたまげたような顔できいた。

「……行つて、かいでござんなさい。すぐわかるから……」

二十日鼠は動かなかった。

「いつもこんなによく寝こむのか」力一杯扉を叩いてから、巡查が男にたずねた。「そうじゃない？ ……じや、ひとつ開けて見よう。……鉄槓杆があるかね？ ……なかったらどこかへ行つて借りて来い」

男が鉄槓杆を担いできた。巡查は槓杆をうけとると、扉の下へそれを差込んで、ぐいともちあげた。蝶番がはずれ

た。錠の門下^しがまだ邪魔^{まが}をしている。うん、と肩でひと押し。扉は内側へまくれこんだ。

むっとするような重い臭いが鼻をつく。手さぐりで壁の点滅器^{メイト}をおす。……照明^{メイ}がはいって、そこで虐殺の舞台装置^{メイ}が、飛びつくように、一ペンに眼の前に展開^{カタル}された……。

敷布^{シキフ}のくぼみの血だまり、籐椅子^{フナ}の上の金盥^{キンラン}には、赤い水が縁まで、なみなみとたたえられている。血飛沫^{チシヤク}が壁紙と天井になまなましい花模様^{ハナモヨウ}をかいている。……そのすべから、むせつかえるような屠殺場の匂^{ニオイ}がたちのぼっている。寝台と壁の間の床の上に、裸の人間の足……乾いて小さくしなびた老人の蹠^{ヒソカ}がつきだされていた。

「おや！ あそこにいた。……ひどいことをしやがったな」

巡査はハンカチで首のまわりを拭いた。

氣抜けしたような男^{オトコ}のうしろには、五人の客が、明るい電灯の光の下で、ねっとりとかがやく血だまりを見ていた。藁蒲団^{ワラフダン}をしみ通した血が、ポトリ、ポトリ、と床のうえにしたたるのがはつきりときこえる。

二十日鼠^{ニヨビネ}は背中を丸くして、齒の間から荒い呼吸^{キコウ}をしていた。草笛のように甲高くヒューヒュー鳴る音は、血の滴る陰気な音と交りあって、ひとの氣持ちをいらいらさせた。娘は青年の方をふりかえると、溺れかかるような眼つきをした。青年は急いで娘の傍へよると、腕のなかへ抱えた。娘は蒼ざめた額をおさえながら、夢のさめきらないひとの

ような声で、どうぞ……階下へ……と、いった。

その声で巡査がふりかえる。五人を見ると、はじめて氣がついたように、男^{オトコ}にきいた。

「この連中はなんだね」

「店のお客です。始めてのひとばかりなんで……」

「ふうん。……さ、みんな、おりた、おりた。帰らずに階下で待っている。……もうここへあがって来ることはならんぞ」

巡査はみなを階下へ追いおろすと、あたふたと街路へ出て行つた。

自動車^{自動車}がとまり、警部の一行がはいって来て二階へあがつて行つた。一人の巡査は、こらこら、と言って店先の弥次馬^{ヤジウマ}を追い始める。

検証は四十分近くもかかった。警部は低い声で二人の部長とささやきながら降りて来た。酒場の卓の前へ坐ると、じろじろと五人の顔を見廻した。手帖を出しながら、「そこで、……(二十日鼠を指して) ちよっと、……君から始めよう。なんだい君は。ここへなにしに来たんだね、今朝？」

「わたくしども五人は、ある不明な人物から、今日の十時までにここへくるように指定されまして、それでやってまいったのでございますが、……しかるに、当の告知人は、とうとう姿をあらわさなかつたというわけで。……手紙とは、すなわちこれでございます」